

Title	ジュエリー:その意味とデザインの変遷 : 19世紀を中心に
Author(s)	金, 相美
Citation	デザイン理論. 48 P.80-P.81
Issue Date	2006-05-31
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/53288
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

ジュエリー：その意味とデザインの変遷 — 19世紀を中心に

金 相美／大阪大学大学院文学研究科

装身文化は、人類の誕生とともに始まったと言っても過言ではない。その長い歴史のなか、ジュエリーはさまざまな用途のもとで愛好されてきた。そうしたジュエリーのもつ、意味と様相に大きな変化が見られたのが19世紀である。産業革命における技術革新と中産階級の増加、女性の社会進出による影響などは、これまでのジュエリーの存在価値を大きく変えたのである。そうした19世紀ヨーロッパ、特にイギリスにおけるジュエリーの意味とデザインについて述べる。

伝統的ジュエリー

ジュエリーの主な役割は、装飾と象徴である。装飾とは、言うまでもなく装身の最後の仕上げとして、身につける人を引き立たせる役割を言う。象徴は、時代と地域によってその特徴がさまざまであるため、一概に定義することは難しいが、ジュエリーが護符、宗教、権威、権力などを表すために用いられる場合と云ってよいだろう。

以下は、チャールズ・ディケンズの『リトル・ドリット』(1855年)の一部である。「成り上がりの大富豪マードルが結婚した女性は豊かな胸の持ち主だったが、それはまさに宝石をぶら下げるのに最適の場所であり、この胸を宝石で飾りたてると宝石は素晴らしく見栄えがして社交界の注目を集め賞賛を得たので、この結婚は確実に大成功の投機だった」。身分や血統による貴族社会が二つの革命、つまりフランス革命と産業革命を経て、市民社会に変わった。新たな社会のリーダーの地位を獲得したのが、成り上がりの大富豪、ブル

ジョアたちである。彼らは、貴族に劣らない高い趣味を見せると同時に、一般庶民との格差をつける必要があり、成功の証として高価なジュエリーを身につけていた。そのような需要の傾向は、素材の選択と加工、つまり高価な宝石や貴金属を取り入れ、効果的なカットニングやセッティングを施すことに注意を払わせた。それは、素材(宝石や貴金属)とその細工を重視するジュエリーの伝統を引き継ぐものであり、形成していったと考えられる。

量産ジュエリー

ブルジョアたちの贅沢な消費パターンとは対照的であったものの、庶民にも手軽に既製服が手に入るようになり、ジュエリーの需要も拡大した。それにともない機械によるジュエリーの大量生産、人造宝石の開発、新素材の投入がより活発になったのも19世紀の特徴。そのような変化は、権力、権威、成功の証としてのジュエリーの働きを必要としない大衆に相応しいジュエリーの価値を求めさせた。当時、特にイギリスで多く生産された「センチメンタル・ジュエリー (Sentimental Jewellery)」をその一環として考えることができる。例えば、センチメンタル・ジュエリーのなかには、いわゆるリガード様式と呼ばれるものがある。ルビー (Ruby)、エメラルド (Emerald)、ガーネット (Garnet)、アメジスト (Amethyst)、ルビー (Ruby)、ダイヤモンド (Diamond) の組み合わせは、それぞれの頭文字で REGARD、つまり好意を意味することになる。ジュエリーに誕生石

や花言葉などの意味が付けられ、強調されたのもこの時代の特色。なぜ、ジュエリーに話題性や特殊な意味を付加する必要があったのか。ジュエリーは、第三者にとっては、並べられた宝石の経済的意味しか持たない。それが、大衆化・量産化されたジュエリーともなると経済的価値さえ持たない。しかし、そのようなジュエリーに意味を与えることによって、身につける人、贈る人、つまり消費する人にとっては特別なものになりうる。ジュエリーの大衆化・量産化は、話題性や意味の付加によるジュエリーの新たな価値とあり方を生み出したのではないか。現在の安価なジュエリーにおいても当時のデザインの影響が色濃く残っており、今後もジュエリー・デザインの一要素として働くであろう。

アーティスティック・ジュエリー

初めてジュエリーが「アーツ・アンド・クラフツ展覧会」に展示されたのは、1889年の第二回目からのことである。洗練されたモザイクやエナメルのはりしは、人々の興味を集めるのに充分だった。しかし、ジュエリーにおける新価値を導くまでの斬新なデザインには至らなかったと言う評価が与えられた。以後、アーツ・アンド・クラフツ・ジュエリーは、徐々に独自の地位を獲得し、多くの優れたジュエラーが現れるが、彼らは経済的には恵まれなかった。と言うのは、安価な素材が用いられたが、デッサンやデザインに多くの時間が費やされ、さらに全ての工程が手作りであったため完成品が高価なものとなり、伝統的ジュエリーにも、量産ジュエリーにもならず、少数の芸術愛好者がその買い手となったのである。アーツ・アンド・クラフツ運動のみならず、工芸品としてジュエリーを語る時、常にジュエリーの贅沢さと浅薄さの問題に悩まされる。なぜ、アーツ・アンド・クラフツ運動

を支持したデザイナーたちは、問題性の多いジュエリーに眼を向けたのか。彼らの創作活動はどのように評価されるべきなのか。ジョージ・ガスキン（1868-1934）は、石は経済的価値ではなく、その構成からなる美的価値によって選び、全ての工程は手作業で行うことを、ジュエリー制作の原則としていた。ガスキンの言う素材の選び方は、ジュエリーにおける伝統的価値の壁を越えるものであろう。また、チャールズ・ロバート・アシュビー（1863-1942）は、作業場は、商人の手ではなく、芸術家の情熱で運営されると言った。アシュビーが、ジュエリー制作に対して「アーティスト」という言葉を用いたことに注目したい。彼らの活動は、アーツ・アンド・クラフツ運動がかかげた機械化による品質の悪化やクラフツマンシップの喪失に対する反発に基づくものではないように思われる。彼らの素材の選び方や斬新なデザインの追及、特に絵画を研究し、デッサンに力を注いだことなどを考えると、彼らの創作活動は、ジュエリーに新たな造形性を取り入れ、芸術としての新分野を開こうとしたように思われる。実際、彼らの作品は、後に現れるアール・ヌーヴォー・ジュエリーの先触れである。

ジュエリーの意味とデザインの変遷を、19世紀を中心に見てきた。その特徴は、次の三つに分類される。まず、素材の価値を重視する伝統的ジュエリー。次に、大衆のために量産化されたジュエリー。そして、工業量産品に対するアンチテーゼとして登場したジュエリー。それらのジュエリーは、次第に芸術創作の対象としての位置を獲得することになる。上記の三つの流れは、19世紀におけるジュエリーの特徴であり、今日のジュエリー・デザインに多大な影響を与えている。